

養徳社の風景(一)

福家 崇洋

令和元年度研究会論考

はじめに

敗戦前年の1944年、養徳社という出版社が設立された。住所は、奈良県山辺郡丹波市町大字川原城町（現在の天理市）で、天理時報社内に本社があった。

所在地から明らかなように、設立には天理教が関わっている。戦時下で出版社の整理統合が求められるなか、天理時報社出版部、甲鳥書林、六甲書房、朱雀書林、日本古書通信社が合併してできたのが養徳社であった。

同社は、敗戦前後の困難な時期に、多くの日本・西洋文学、哲学、民俗学、美術関係の書籍を刊行して、日本の出版史を支える重要な仕事をした。戦時下で自由な出版とはいかなかったはずだが、時局に必ずしもおもんねることのない姿勢が刊行物の一端から垣間見える。

これまで養徳社は、学術研究の対象というよりは、古書や出版史に関心を持つ人たちの地道な仕事によってその存在が明らかにされてきた。（※註1）現在も存続する養徳社は、

ホームページに「創設のころ 養徳社創立六十年」（PDFファイル）を公開して、自社の歴史を伝えている。（※註2）

近年では、養徳社に関わった作家が交わした書簡や日記なども公開されはじめている。これらの資料にあたることで、本論は、養徳社がいかにして生まれ、活動を続けてきたのかを、思想史研究の方法論を用いて描き直すことを試みる。

その際、着目したいのが、作家との交流をふくめた出版社の活動である。思想史の研究は個人の思想に焦点をあてることが多い。その場合、作家と読者の関係が優先され、出版社の存在は背景として扱われる。しかし、実際は、作家と読者をつなぐのが出版社であり、社会への広がりや影響を考えると、作家、出版社を個々に分析するよりは、作家と出版社をひとつのまとまりととらえる視点が必要ではないかと考える。（※註3）

なお、本論では、扱う時期を1940年代から50年頃までとする。この時期に限定するのは、養徳社自身の事情にもよるが、(※註4)戦時と戦後における日本社会の連続性を検討するためである。これまで敗戦前後の日本社会を連続ととらえるか、断絶ととらえるかをめぐって議論が積み重ねられてきたが、本論は出版社という文化の担い手を対象として、この問題を考えてみたい。同時に、戦前から戦後へという時間軸だけではなく、奈良、京都、東京という空間軸も念頭に置くこととする。

結論を急げば、本稿は、いわゆる「戦後保守」の源流はどこにあるのか、という問いに迫るための予備的考察を想定している。「戦後保守」論の研究については、古くは久野収・鶴見俊輔・藤田省三による「日本の保守主義 『心』グループ」(『戦後日本の思想』岩波書店、1959年)があり、近年では多くの「保守」論が登場している。

しかし、そもそも「保守」概念の定義をうまくできていないために論者の考える「保守」の恣意的・頂点的な抽出にならざるをえないこと、また戦時と戦後の連続性に対する視点や文化の側面からの分析が弱いことなどの難点がある。本論では、まず「保守」を定義して演繹的に日本社会を切り取るのではなく、敗戦をまたぐ作家、出版社の交流圏に着目することで、文化の側面から「戦後保守」の源流について考えてみたい。

1 天理時報社と甲鳥書林

本章では、養徳社設立までの時期を追うが、合併に際して中心となった天理時報社と、合併先の出版社(甲鳥書林、六甲書房、日本古書通信社、朱雀書林)についてそれぞれ論じる。

天理時報社は、一般社会への文書伝道をより積極的に行うために、1940年に天理教教庁印刷所を改組し、『天理時報』『みちのとも』を刊行してきた道友社と合併する形で設立された。その場所は先に伝えた、奈良県山辺郡丹波市町大字川原城町(現在の天理市)である。(※註5)

当初は天理教関連の書籍を刊行していたが、1942年頃から傾向の異なる書籍も世に送り出す。同年では、保田與重郎(※註6)『風景と歴史』、田中克己『神軍 詩集』、中谷孝雄『旅情』、前川佐美雄『天平雲 歌集』などがある。

この人脈は、神保光太郎、亀井勝一郎、中島栄次郎、中谷孝雄、緒方隆士、保田與重郎を初期同人とする『日本浪漫派』(1935年創刊)に近い。(※註7)『コギト』30号(1934年11月)に掲載された彼らの『日本浪漫派』広告では、「平俗低徊の文学」の流行に対する「流行に対する不易」「従俗に対する本道」を主張する文学運動こそ日本浪漫派であることが謳われている。(※註8)

田中克己は大阪出身で、東京帝大在学中の1932年に保田與重郎ら大阪高等学校時代の同窓生とともに『ユギト』を創刊した。(※註9)

この『日本浪漫派』『ユギト』の一部の人々は1939年8月に中河与一が創刊する『文芸世紀』とも関わりを持つ。(※註10) 保田、田中、神保光太郎(3人は同人になる)、中谷伊東静雄らである。くわえて、同誌には武者小路実篤や三島由紀夫、また短歌では吉井勇や前川佐美雄、斎藤史がそれぞれ投稿した。

その前川は、奈良出身で佐佐木信綱に師事した歌人である。(※註11) 1933年に奈良に戻り、翌年『日本歌人』を創刊、ここに保田も寄稿した。また、前川は、1939年に保田、田中、中谷も関わる新ぐろりあ叢書から『歌集くれなゐ』を刊行し、日本浪漫派とも近かった。

おそらく奈良在住の前川と天理時報社との関わりが生じ、そこから日本浪漫派人脈へと広がっていったのではないか。1943年には天理時報社で「大和シリーズ」の刊行が始まり、そのなかにはよく知られる亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』がある。同書の「後記」で次のように記されている。

ところでかういふ本を刊行することが出来たのは、奈良の畏友前川佐美雄君と天理時報社の上田理太郎氏のお蔭である。いままでも時に古寺の感想を発表したことはあつたが、本にまとめることは考へてゐなかつた。偶々

前川君を介して上田氏と知りあひ、その懇切な徳憑によつて、昨年の初秋から冬へかけて漸くまとめあげることが出来たのである。(※註12)

ともに奈良に住む上田(天理時報社出版部長)(※註13)と前川は以前から交流があつたと思われる。後述するが、この天理時報社と日本浪漫派の付き合いが、その後の『大和文学』へ引き継がれていく。

次に、合併先の出版社に移ろう。該当する出版社は、甲鳥書林、日本古書通信社、六甲書房(※註14)、朱雀書林(※註15)だが、もつとも重要なのは甲鳥書林である。

甲鳥書林が京都で設立されたのは1940年4月となっているが、前年から事実上立ち上がつて出版活動を始めている。社を担つたのは中市弘と矢倉年である。

この2人については、北出楯夫氏の『伊賀の郷土史あれこれ』が詳しい。それによると、中市は1911年11月、三重県伊賀市上野町生まれ。郷里の小学校を出たあと、京都の桃山中学校をへて、1938年に日本大学法学部を卒業。文学に踏み込むきっかけは、大学卒業後に胸を病み、湘南のサナトリウムで、斎藤茂吉の弟米国と知り合い、短歌を始めたことによるようだ。

それからまもなくして、中市は前川佐美雄の「日本歌人の会」に入会して京都下鴨に居を移した。1939年6月に、

中市はのちに姉婿となる同郷の矢倉年（本名稔）とともに北白川にいた歌人の吉井勇宅を訪ね、歌集出版を依頼した。吉井からは、社名について、創業の地となる下鴨の鴨にちなんだ「甲鳥」の案を示され、甲鳥書林を下鴨泉川町に創立した。（※註16）

意外だったのは、ここでも出てきた前川の存在である。確かに調べると、甲鳥書林から1940年8月に前川の『大和歌集』が「昭和歌人叢書」として刊行されている。同叢書ではほかに坪野哲久、斎藤史、岡山巖、筏井嘉一、岡野直七郎、五島茂・美代子夫妻が同年から翌年にかけて歌集を刊行したが、彼らの多くは前川と関わりのある人物であった。

例えば、1928年に結成され、プロレタリア短歌に取り組んだ新興歌人連盟には前川、坪野、筏井、五島夫妻らが参加していた。また、1940年に刊行された共同歌集『新風十人』の参加者（前川、坪野、斎藤、五島美代子、筏井）もこのシリーズに参加していた。

こうした前川をはじめとする歌人との付き合いが、京都在住の吉井勇や川田順との交流につながっていったと考えられる。上司海雲（東大寺塔頭観音院住職）の「吉井先生の想い出」には、「戦争も末期の昭和十八、九年の十二月十六日」頃に、「何でもそのころの先生は創元社からのまれた短歌風土記のために大和路を〆〆巡礼中で寺へも拝観に見えることは日本歌人の前川佐美雄氏から連絡があった」（※註17）とある。吉井と前川が交流していた可能性は高い。また、吉井は前年

の1942年に天理時報社から『雷 歌随筆』を刊行していた。川田との関係で言えば、前川も川田も佐佐木信綱の弟子である（そして後述の新村^{しんむら}出も）。しかし、この前川、吉井、川田、天理教の各交流が甲鳥書林との関係でどのように活かされたのかを裏付ける資料は今のところ見いだせていない。

ちょうど、吉井は1938年10月に高知から京都へ、（※註18）川田もその2年後に神戸から京都へ移住していたので、出版社を立ち上げるタイミングに恵まれていたともいえる。

甲鳥書林の最初の刊行物は、吉井勇の歌集『天彦』と武者小路実篤の『井原西鶴』である。いずれも1939年10月に刊行された。『井原西鶴』は1931年6月から8月にかけて『時事新報』で連載されたもので、初版の版元は春陽堂である。（※註19）

他に関係した書き手としては、堀辰雄、柳田國男（※註20）、中谷宇吉郎（※註21）のほか、京都の下鴨というところで、新村出や佐々木惣一らの京都帝大教員も多い。

堀はこの時期、詩雑誌『四季』（第2次、1934年創刊）の同人で、編集に携わっていた。同誌の「主張するところは、われらの雑誌をして為さしめるかぎりに於いて、それらの消長の波間に在つてなほ永遠不易な詩の高き伝統の継承に与らしめやうといふにある」（※註22）として、詩の純粋な追究が記されている。他の同人には、三好達治、丸山薫、井伏鱒二、萩原朔太郎、室生犀星、佐藤春夫、中原中也、神西清

津村信夫、桑原武夫（三高時代に三好と学友）、田中克己、神保光太郎（『日本浪曼派』同人でもある）らで、のちに日本浪曼派の伊東静雄、保田與重郎、大山定一らも加わる。（※註23）

堀は、1941年に『晩夏』を甲鳥書林から刊行した。その前年から矢倉と書簡のやりとりは始まっており、1940年7月27日付の書簡ではアポリネール短篇集の刊行について記されている。（※註24）

柳田は1940年11月に甲鳥書林から『野鳥雑記』『野草雑記』を刊行した。編集を担当した矢倉とのやりとりは小田富英編『柳田國男全集』別巻1（筑摩書房、2019年）「年譜」に記述されている。その1940年11月25日条に「この日の前後、出来上がった『野草雑記・野鳥雑記』の見本を持って矢倉を訪ねてくる。目次の終わりに「柳田國男装てい」と書いてあるのを見て声を出して笑う。」（※註25）などがある。

新村は、先述の通り、佐佐木信綱の弟子で、彼を介して川田との交流が生まれた。新村出記念財団に残る新村宛川田書簡は、1935年3月が最初だという。（※註26）のちに、新村は川田に連れられて吉井宅を訪問して三者の交流が生まれることになった。（※註27）時期は不明だが、土岐善麿宛新村出書簡（1943年11月1日付）には「当地川田順吉井勇両歌伯とは屢々雑談之機あり候。」（※註28）とあるので、この頃にはすでに交流が始まっていて、新村も甲鳥書林に関わっていったと思われる。

以上の書き手を見れば、東京在住と京都在住にまたがっているが、甲鳥書林は創業当初から東京に拠点を持っていた。当初は世田谷区太子堂町だったが、1940年代初頭の刊行物奥付を見ると神田区鎌倉町、京橋区銀座3丁目が見られ、のちに後者に統一された。（※註29）東京の拠点を仕切っていたのが矢倉で、（※註30）土橋利彦（塩谷賛、幸田露伴研究に従事）も入社してくる。

この多彩な執筆陣は、図書の刊行だけではなく、甲鳥書林が刊行する雑誌にも活かされた。『甲鳥』と『文化評論』である。『甲鳥』は1939年10月に創刊され、15号（1943年7月）まで続いた。吉井、武者小路、川田が常連の執筆家で、ほかに新村、高田保馬、太宰施門、堀辰雄の寄稿も見られる。彼らのエッセイや歌を載せつつ、刊行物の案内をすることというのが雑誌の内容である。15号に掲載された、句集の案内では「装幀に印刷に製本に、この種の本にふさはしい、書林伝統の良心と技術をもつて努力いたしました」（※註31）とあるように、戦時下でも良心を持って妥協をしない本作りを心がけていた。読者の反応もよく、同じ案内で「新刊本も発売早々に売切れる状態」で、旧刊本もごく少数残本を残すのみと記されている。（※註32）ただし、『甲鳥』も15号で途絶えていて、紙も限られるなかで、難しい業務と経営を迫られていたと思われる。1940年に創刊された『文化評論』も出版統制で2号限りとなったが、（※註33）坂口安吾や堀辰雄が寄稿、サルトルの「嘔吐」の翻訳も掲載された。

2 養徳社の設立

ここからはいかにして養徳社が生まれたのかに話しを移そう。

直接のきっかけは戦時下の企業統合と紙の欠乏である。「創設のころ 養徳社創立六十年」によれば、天理時報社出版部は1200ポンドの配給実績だったが、4000ポンドに満たない出版社は整理統合の対象となったため、他の出版社と統合して規定ポンド数を確保する必要があった。そこで、まず呼びかけたのが甲鳥書林である。なぜ甲鳥書林だったのかという問いに答える資料はないが、双方に関わる前川や新村出の仲介があったのかもしれない。(※註34)

養徳社の設立については、養徳社が刊行した『昭和十九年度(自昭和十九年十月十四日 至昭和二十年三月卅一日) 第壹回営業報告書』に詳しい記述がある。

即ち本社ハ政府及日本出版会ノ指導斡旋ニ基キ、出版事業ノ整備及ビ其ノ要請ニ従ヒ、株式会社天理時報社ノ書籍出版ニ関スル事業ヲ同社ヨリ分離シ、新二甲鳥書林、六甲書房、日本古書通信社、朱雀書林等ノ諸出版業者ヲ合併統合シ、新事業体株式会社養徳社ヲ創立、教養専門図書部門及文芸図書部門ヲ担当シ、以テ皇国文化ノ宣揚ト戦力増強ニ寄与セントシ、昭和十九年五月一日出版事業開始許可申請書ヲ内閣総理大臣並ニ内務大臣ニ提出、同年八月二十五日付事業開始許可ノ指令ヲ受ケタリ。而シテ当初資本金五拾

万円ノ計画ナリシモ、当局ノ指令ニ基キ金参拾万円トシ、発起人ニ於テ同年九月二十日定款ヲ作成、同月二十二日奈良地方裁判所々属公証人吉田律氏ノ認証ヲ受ケ、直チニ株式ヲ公募、同年拾月参日創立株主總會ヲ経テ、同年拾月拾四日奈良区裁判所丹波市出張所ニ於テ、会社設立ノ登記ヲ完了シ、茲ニ株式会社養徳社ノ発足ヲ見タルモノナリ。(※註35)

戦時下で時局に対応した文言も見られるが、それでも「教養専門図書」「文芸図書」を刊行しようとしたところに養徳社の気概を見いだすことができる。1944年10月が正式な設立時期だが、後述のように、1943年9月頃から図書の刊行は始まっており、1944年5月頃には柳田ら関係者にも伝えられたようである。(※註36)

養徳社の社名は、天理教の管長で二代真柱の中山正善なかやましようぜんによる。天理教ではすでに他の施設などで「養徳」という名称を使っていたので、ここにも適用されたと思われる。(※註37) 前掲の引用にある「定款」も存在し、「当会社は株式会社養徳社と称す」からはじまる全36条が列記された。第36条には株式会社として引き受け株数が記載されており、「株式会社天理時報社 会社を代表すへき取締役」岡島善次が2250株、中市弘が750株、後藤総一郎が1000株、松井忠義が350株、矢倉稔が100株、高橋道男、富永牧太、上野清治、生駒藤雄がそれぞれ50株となっている。(※註38) 株数のみ見れば、圧倒的に天理時報社の資本で成り立っていることがわかる。

このメンバーはそのまま養徳社の発起人、役員となった。10月3日に会社創立株主総会が、天理時報社内の創立事務所で開催、取締役役に中市、岡島、矢倉、高橋、富永、上野が、監査役に松井、後藤、生駒が選任され、取締役会で代表取締役・取締役社長に中市が、代表取締役・専務取締役に岡島が選任された。「創設のころ 養徳社創立六十年」によれば、中市と矢倉以外はすべて天理側の人たちで、松井は天理時報社の専務取締役、後藤は監査役、生駒は編集部長、富永は天理図書館館長である。(※註39)

養徳社の本社は天理時報社に置かれ、支社も京都と東京に設けられた。京都支社の場所は甲鳥書林があつた下鴨ではなく、中京区三条通高倉東入榭屋町である。(※註40) 東京支社は甲鳥書林以来の京橋区銀座3ノ4である。これら社の構成は『天理時報』717号(1944年5月14日)で周知された。(※註41)

合併に際して人員の増加も行われ、庄野誠一と木村徳三が新たな編集陣に加わった。庄野は慶應大仏文出身、三田系の水上瀧太郎門下である。彼は『文藝春秋』編集者をしていたこともあったが、(※註42) 養徳社に来たのは矢倉の声がけによる。

矢倉と庄野の出会い、堀辰雄から庄野誠一に宛てた「昭和十六年夏(推定、月日未詳)」の手紙に「矢倉君にお会ひになつたらよろしく」とあるほか、1941年8月6日付の手紙にも「甲鳥書林の方は初校(甲鳥書林から1941年9月に刊行される『晩夏』を指すと思われる 引用者)もう全部

すみました」と書いているので、1941年頃から甲鳥書林にも関わっていた可能性がある。(※註43) 庄野は養徳社の東京支社に勤めたが、のちに空襲で奈良の本社に移ってくる。

もうひとりの木村徳三も編集者である。三高をへて東京帝大仏文卒。改造社で『文芸』の編集を担当したが、1944年に改造社が解散命令を受けて、『文芸』は河出書房に譲渡。職場を失った木村は、庄野の声がけで、養徳社の京都支社に勤めることになった。この時の様子を木村は次のように語っている。

私と庄野さんとは、庄野さんが文藝春秋社の編集者時代からの顔見知りで、話というのは、養徳社の京都支社で企画編集長を求めている、そこで、「君は京都が郷里だから、この際疎開をかねて、また肩書つきだと徴用逃れに役立つだろうから、ひとつ行ってみないか」という、願つてもない勧誘であつた。関西落ちはいささか残念だが、この際気促なことは言つてられない。その上、日頃敬愛する庄野氏の推薦であり、また同氏と同じ社で働ける期待もある。それほどの親交もあつたわけでもない私に殊更に声をかけてくれた庄野さんの厚情が私には限りなくありがたく、即答で話を受けた。(※註44)

木村は9月上旬に本郷の家をたたみ、京都御所の最寄りの家を見つけて移り、10月から養徳社京都支社に勤務した。こうして支社、スタッフとも充実した養徳社は、出版業を進めていく。設立パーティーには川端康成が鎌倉から駆けつける

など、戦時下で出版事情が悪化するなか、養徳社にかけられた期待も大きかった。

とはいえ、木村の回想では、旧出版社の紙型を使用することが多く、編集作業は少なく、紙不足から印刷部数も少なかったという。(※註45) 1943年に養徳社から刊行された図書を見ると、中谷宇吉郎『樹氷の世界』、新村出『新村出選集』、吉井勇『定本吉井勇歌集』など、甲鳥書林の常連執筆家が多い。実際、奥付の印紙も甲鳥書林そのままになっているケースもある。

他の執筆者としては、川田順、堀辰雄、武者小路実篤、柳田國男、湯川秀樹らがいる。甲鳥書林の関係者が占める。堀辰雄との関係は甲鳥書林以来で、1944年9月に『曠野』を養徳社から刊行した。その印税などをめぐって、軽井沢に疎開した堀から中市弘に送った手紙が『堀辰雄全集』に収録されている。(※註46)

また、柳田も1944年5月に三木茂との共著『雪国の民俗』を養徳社から刊行しており、この経緯も『柳田國男全集』別巻1の「年譜」に記載されている。養徳社との関係者として名前があがっているのは村治夫、矢倉年、土橋利彦、青木うたで、とくに村と矢倉がよく柳田のもとを訪問している。(※註47)

このように、甲鳥書林が持っていた作家との人脈はそのままに、印刷・出版のバックアップを養徳社がするというのが実状だったと思われる。(※註48)

養徳社の独自企画としては「養徳叢書」がある。これは1945年3月から刊行が始まり、敗戦の8月までに高浜虚子『斑鳩物語』、中谷宇吉郎他『科学随筆選』、水上瀧太郎『父となる記』、芥川龍之介他『童話名作選』、鈴木三重吉『古事記物語』を刊行・復刊し、戦後も長らくこの企画は続いた。その趣旨について「日本民族の心を豊かにし高い教養の地盤となり、人生に対する深い理解と智慧を与へ、そのあり方について正しい示唆を提供するものを幾多の作品中より厳選して世に送ることにした」(※註49)と戦後の刊行物では記されている。

また、甲鳥書林以来、一時途絶えていた雑誌も刊行された。京都支社内に、乗合船刊行所が設けられ、『乗合船』が1945年5月に創刊された。(※註50) 誌面は「同人詠草」「寄稿雑叢」「風塵詠草」から成るので、和歌を中心とした雑誌であった。

奥付の編集発行人は下鴨泉川町の矢倉年である。矢倉はここに住んで、京都支社に通っていたことになる。

『編輯清記』には、同人として新村出、小杉放庵(吉井勇)『天彦』挿画を担当)、川田順、高田保馬、吉井勇、中川一政、中山正善、湯川秀樹の8名の名前がある。(※註51) 同人と会員に分かれているので、他の執筆者の武者小路実篤、大町文衛、上村六郎、安藤彦三郎、中市弘、田島とう子、矢倉年が会員枠になるのだろうか。元甲鳥書林の関係者が占めることはいうまでもないが、歌人の田島は前川佐美雄の関係者である。

刊行の辞とも言える「小引」は「伊豆流翁」こと新村出の筆による。冒頭には「乗合船は、俗に似て雅、含蓄あり、詩味あり、人或は典雅乏しきを憂へんも、静好なる雅趣を闕如すとは謂ふべからじ。」（※註52）、「編輯清記」には「有縁無縁の衆の集りて敷島の道に乗合ふ縁を結ぶものなり」とあるので、同人誌の性格が強かったといえるが、「社の発表機関として瞻写代用たるものなれば、一般に之を発売せず。」（※註53）として、養徳社の機関誌としての位置づけも備え付けられていた。

しかし、その養徳社も戦時下で社会情勢が悪化してくると、京都支社もたまざるをえなくなつた。ここに勤めていた木村も疎開先の滋賀県から奈良県の本社まで通う。この時の様子を彼は「ただひとり真つ暗な野道を辿る途中で、翼をつらねて頭上を通過する敵機の群に言い知れぬ恐怖感に襲われたり、広い平野の彼方から真珠色の雲霞のような源氏螢の大群が近づいてくるのに戦慄したり そんな単に身体を酷使するだけの通勤を飽きもせず、休みもせずに送った。」（※註54）と回想する。

3 敗戦後の離散

ここからは敗戦後の養徳社の活動を追う。戦時下のやむない合併で養徳社が誕生したが、敗戦をへて、社の体制は変化した。

まず中市と矢倉である。『伊賀の郷土史あれこれ』によれ

ば、中市は敗戦後の8月に郷里に戻り、上野市西ノ丸に住居を新築した。（※註55）その翌月、堀辰雄が心配して「このあひだ養徳社の本社より中市さんが社長を辞せられた由の知らせが参り、あまり突然の事にてどうなされた事かと心配してをります。が御病気でも悪くなられたのでせうか。その後何かあなたの方からお便りでも思つてをりましたが、少々気がかりになつて参つたので、ちよつとお尋ねいたします」（※註56）という手紙（1945年9月22日付）を矢倉によこしている。

しかし、その矢倉も10月に養徳社を退社した。その理由のひとつは彼らに独立への意志があつたことである。10月28日付で堀辰雄から養徳社の庄野誠一に宛てた手紙には「先日、中市さん、矢倉さんなどよりの書面にて旧甲鳥系の独立の由承知」とある。あわせて、「矢倉君からも君のはうのこと呉々も頼まれました」と書いているので、誘つた本人が先に退社することの後ろめたさがあつたのだろう。（※註57）

もうひとつは、中市・矢倉と養徳社の関係がこれまでとは異なつてきたことによる。これも堀辰雄から庄野誠一に宛てた、12月7日付の手紙に「御手紙拝見、旧甲鳥との関係がはじめてよく分かりました、（いままでは向うの側からの手紙ばかり見てゐたので、よく分かりませんでした）君の御言葉に従つて、これからは即かず離れずぐらゐるところで付合ひませう、これまでなんだか世話になつてゐるやうな気もするので、全然関係を絶つわけにもゆきませんから……」（※註58）とある。庄野から伝えられた旧甲鳥側の非に堀も納得した文面であり、以後堀は庄野のいる養徳社との関係で出版していく。

中市と矢倉の方は、すぐに新しい出版社の設立とはいかず、まず故郷に戻ったようで、1946年1月時点の矢倉の住所は三重県一志郡多気村になっている。(※註59)

それからまもなくして、中市と矢倉は甲文社という出版社を、もと甲鳥書林があつた下鴨泉川町で起こした。刊行された書籍を見ると、甲鳥書林の印紙をそのまま使っているものもある。

1946年3月には湯川秀樹『目に見えないもの』を、4月には川田順『細川幽斎』などを刊行した。甲鳥書林の人脈が、養徳社をへて、甲文社に受け継がれた(あるいは旧に復した)といえる。ほかにも高田保馬、佐々木惣一、中谷宇吉郎、柳田國男、鈴木成高、大山定一(※註60)、貝塚茂樹、大石義雄、太宰施門、武者小路実篤、三宅周太郎など、甲鳥書林人脈、京大関係者の名前が多くを占めるが、より京大関係者が多くなった印象である。

もつとも、京大関係者は甲鳥書林や甲文社を通してだけでなく、自前の学術交流の媒体を持っていた。本論で言及しておきたいのが大東亜学術協会とその機関誌『ひのもと』『学芸』を経て『学海』と改題)である。(※註61)

大東亜学術協会とは、1942年6月に設立された学術団体で、会長新村出、顧問松本文三郎、狩野直喜、羽田亨、西田直二郎、理事には田辺隆一、田中二郎、新城英太郎、村田治郎(発起人でもある)、岩井武俊で、会員には宮崎市定、田村実造、

塚本善隆、今西錦司、森鹿三、小川(貝塚)茂樹、水野清一、藪内清、藤枝晃、柴田実ら京大帝大文学部、東方文化研究所員が多い。

それもそのはずで、「学芸」の編輯方針は、大東亜の民族、風土、文化に関する記事を蒐めるにある。その記事を蒐めるためには学界が大同団結して、それだけの方面の権威者に執筆を依頼できるやうな体制にならねばならない。大東亜学術協会はそのため出来たのである(※註62)とあるからである。

他の執筆家としては、2巻2号(1944年2月)の座談会「過去の支那と現在の支那」には桑原武夫も参加し、翌号に寄稿。「学芸」は1944年6月から『学海』と改題したことを受けて内容に変化が見られ、吉井勇による歌や、(※註63)吉川幸次郎と大山定一による「洛中書問」がはじまる。また、新村出、須田國太郎、西谷啓治、湯川秀樹、高坂正顕、中村幸彦(天理図書館司書)の投稿も見られ、甲鳥書林、養徳社、甲文社と執筆者が一部重なっている。

甲文社の話しに戻れば、敗戦間際に創刊された『乗合船』の第2号が、甲文社を発行先として1946年5月に刊行された。構成は創刊号とほぼ同じ「同人詠草」「寄稿雑載」「風塵詠草」からなる。同人の新村出、小杉放庵、川田順、高田保馬、吉井勇、湯川秀樹の歌が掲載された。(※註64)寄稿雑載には、佐々木笹舟(惣一)、野村あらえびす(胡堂)、佐佐木信綱(じゅがくぶんしょう)、野村や寿岳など新たな執筆者が登場している。人脈を中心に、野村や寿岳など新たな執筆者が登場している。

『乗合船』は2号で途絶え、今度は雑誌『手帖』が甲文社から1947年8月に創刊された。創刊号の編集者は中本敏春、発行者は中市弘である。「あとがき」には「手帖」は、以前の「乗合船」を改題して新出発したものである」（※註65）とあるが、その内容は『乗合船』とはだいぶ異なる。

ここにはそれなりの意図があったようで、「われわれがこの『手帖』に対する抱負は、一般通用の雑誌から、解放された感覚を、その内容にも、その製本技術にも示すことにある。あくまで斬新に、そしてまた大胆率直な編輯をしたい」（※註66）と述べている。確かに、製本からして、小B6判横本で斬新な印象である。執筆陣も同様で、創刊号には桑原武夫、湯川秀樹、釈迢空（折口信夫）、柳田國男、梅原末治、大山定一、草野心平、吉川幸次郎、三宅周太郎の面々が並ぶ。

『乗合船』と重なるのは湯川のみで、2冊には吉井勇や小杉放庵、3冊には佐々木惣一の文も見られるが、『乗合船』の執筆者とは異なる甲鳥書林の人脈に書いてもらっている印象である。とくに2、3冊に中谷宇吉郎、2、3、4冊に鈴木成高、5冊に西谷啓治が書いてるのが目を引く。伊東静雄も3冊に一度のみだが寄稿している。

これは、「あとがき」でも書いているように、『手帖』が「第一流の随筆をあつめる考へ」に基づいていたためである。ただしそこに安住するのではなく、「従来の随筆の型を大胆に打ちやぶつてゆく」ものが目指される。これが意味するのは、「ただあぐらをかいて書きさへすれば、何を書いても随筆に

なるといふ風な自堕落さが見える」日本の随筆ではなく、「近代散文精神の自覚と形式的完成がある」ヨーロッパの随筆に範をとるということであった。（※註67）この日本の随筆とは誰を想定しているのかわからないが、敗戦後の日本社会を領導する精神のかたちを、随筆を通して模索していた。

ただし、この試みが成功したかは別の話である。雑誌は1949年6月に5冊で途絶えたほか、甲文社の経営も順調とはいかなかったらしい。（※註68）『伊賀の郷土史あれこれ』に再録された、奥瀬平七郎がサンケイ新聞伊賀版に書いた回想には、「翌（昭和）二十四年早々、中市氏経営の甲文社が、営業不振で閉店した」（※註69）とある。

甲文社は1950年以降も図書を刊行しているので記憶違いの可能性もあるが、経営が苦しかったことは事実かもしれない。1950年には矢倉年が同じ下鴨泉川町で書林新甲鳥という新たな出版社を起こして出版を続けているが、（※註70）かつての勢いを取り戻すことはなかった。

敗戦後の養徳社は中市と矢倉に続いて、木村徳三も失った。彼の回想『文芸編集者の戦中戦後』に書かれているように、鎌倉文庫で雑誌創刊を考えていた川端康成から誘いの電報をもらったのである。彼は養徳社を退社して、鎌倉文庫に入社し、編集長として雑誌『人間』を送りだしていく。

『人間』は1945年12月に創刊された。（※註71）戦後の出発にあたって、「文化国家」の建設を使命とすることが謳わ

れている。創刊号には永井荷風、正宗白鳥、川端康成、島木健作（遺作）、林芙美子らの作家が名を連ね、「人間」創刊が発表されるや、打てば響くやうに、驚くべき多数の購買予約申込が殺到し、以後連日、その整理に鎌倉文庫社員一同大童の形」（※註7）などと反響の大きさが綴られている。

『人間』は戦後の日本文学史ではよく知られているが、本論では養徳社や甲文社との関わりに絞って見ていきたい。2号以降、養徳社の広告が雑誌に頻出する。最初の広告には、亀井勝一郎『大和古寺風物誌』を筆頭に、新刊価格未定の会津八一『山光集』、柳田國男『笑の本願』、松岡静雄『南溟の秘密』が列記されている。甲文社の広告もわずかだがある。京都時代の木村の人脈がここに生きているといえよう。ただし、1949年に鎌倉文庫が倒産し、『人間』が目黒書房から刊行になると、養徳社、甲文社の広告は姿を消す。

もうひとつ、『人間』の執筆者にも、養徳社や甲文社との関わりをうかがうことができる。鎌倉文庫関係者以外の京都人脈である。

創刊号を見れば、表紙・扉・デッサンを担当した須田國太郎（京都帝大卒）、巻頭論文の西谷啓治（京大文学部教授）、トオマス・マンの翻訳を担当した大山定一（京大文学部講師、46年2月助教）（※註7）、吉川幸次郎（京大文学部講師、東方文化研究所研究員、47年文学部教授）、創作の詩を寄稿した吉井勇の名前がある。すでに何度も名前が出てきたが、吉川、大山、吉井は養徳社や甲文社と近い人びとである。

この京都人脈は創刊号がもつとも濃いのが、号を重ねても、鈴木成高、務台理作、下村寅太郎ら京都学派の人脈が散見されるほか、大山、西谷、吉井も寄稿を続けて『人間』を支えた。

（以下、次回へ続く）



ふけ・たかひろ

1977年、徳島県生まれ。京都大学人文科学研究所准教授。専門は近現代日本の社会運動史、社会思想史。著書に『戦間期日本の社会思想「超国家」へのフロンティア』（人文書院）、『日本ファシズム論争 大戦前夜の思想家たち』（河出書房新社）、『満川亀太郎 慷慨の志猶存す』（ミネルヴァ書房）がある。

〔註記〕

- 1 以下の文献を参照。小田光雄『古本探究Ⅱ』論創社、2009年。林哲夫『古本デッサン帳』青弓社、2001年。『SUMUS』4号(2000年9月)特集「甲鳥書林周辺」。
- 2 以下のアドレスを参照
<https://yotokusha.co.jp/wpcontent/uploads/2015/10/souseitunokoro.pdf> (最終閲覧2019年12月24日)
- 3 こうした観点から思想史研究を行う近年の研究として水谷悟『雑誌『第三帝国』の思想運動 茅原華山と大正地方青年』(ベリカン社、2015年)がある。
- 4 もうひとつの理由は、1950年頃から、養徳社の刊行物が天理教関係の書籍が中心となるためである。同社ホームページに「昭和27年4月、事業を縮小、以来教外向き出版としては、過去からの継続事業である一部の特別な学術書、専門書の出版を行う」とある。『養徳社だより』5号(1956年2月)を見ると、既刊書籍に続いて「養徳社版天理教書籍」(本部署員叢書)が始まっている。
- 5 1942年度になるが、天理時報社の幹部は取締役社長岡島善次、専務取締役松井忠義、取締役中山慶太郎・堀越儀郎・紺谷金彦・関久米治、監査役上原義彦・後藤総一郎である(天理時報社「昭和十七年度(自昭和十六年七月一日 至昭和十七年六月卅日 第参回営業報告書)」。このうち岡島 松井、後藤が養徳社幹部となる。
- 6 保田については谷崎昭男『保田與重郎』(ミネルヴァ書房、2017年)、『保田與重郎全集』別巻5(講談社、1989年)参照。
- 7 日本浪漫派同人の一覧は中谷孝雄他編『日本浪漫派とはなにか 復刻版「日本浪漫派」別冊』(雄松堂書店、1971年)参照。
- 8 神保光太郎、亀井勝一郎、中島栄次郎、中谷孝雄、緒方隆士、保田與重郎「日本浪漫派」広告『ユギト』30号、1934年11月。
- 9 『ユギト』刊行経緯については田中克己「解説」『復刻版『ユギト』別冊 解説並びに著者別書目索引』(臨川書店、1984年)参照。
- 10 同誌については笹淵友一編『中河与一研究』(右文書院、1970年)参照。
- 11 前川については楠見朋彦『前川佐美雄 二十世紀を力強く生き抜いた昭和の大歌人』(笠間書院、2018年)参照。
- 12 亀井勝一郎『大和古寺風物誌』天理時報社、1943年260頁。
- 13 奈良県教育会『改訂 大和志料』上巻(天理時報社、1944年)に「本書の幹旋に關しては、天理時報社出版部長上田理太郎氏」(2頁)とある。
- 14 日本古書通信社は一誠堂書店に勤務していた八木敏夫が1934年1月に独立して開業した出版社。さらに、その5ヶ月後の6月に八木が開業したのが六甲書房である。1944年3月に八木が応召されたことが合併につながったようだ。詳しくは八木書店のホームページ参照。<https://company.books-yagi.co.jp/history> (最終閲覧2019年12月24日)
- 15 朱雀書林は三宅賢を社長として1940年頃に開業したようである。三宅は早稲田大の露文出身で、開業前はドストエフスキーやトルストイの全集翻訳に関わり、開業後はN・ベルジャーエフ著、香島次郎訳『ドストエフスキーの世界観』高橋亀吉『統制経済の現状と将来』など刊行。
- 16 北出楯夫『伊賀の郷土史あれこれ』岡森書店、2017年。
- 17 上司海雲「吉井先生の想い出」『吉井勇全集月報』6、1978年4月。戦後の1956年になるが、前川は『現代日本文学全集 小山内薫 木下左太郎 吉井勇』17(筑摩書房、1956年)に「歌人吉井勇」を書き、「白秋なく茂吉なき今日の歌壇では吉井さんこそただ一人の歌人」と評価する。
- 18 吉井勇の軌跡は「吉井勇年譜」(定本吉井勇全集)9巻、番町書房、1979年)、細川光洋「吉井勇略年譜」(『短歌研究』85巻11号、2016年11月)を参照。
- 19 武者小路と甲鳥書林の縁がどのようだったのかはわかっていないが、吉井勇は『白樺』に3度ほど短歌を寄せていることが確認できるので、彼を仲介している可能性もある。

20 柳田と新村出との交流は菊地暁・拜啓・新村出様：柳田国男書簡からみる民俗学史断章『国立歴史民俗博物館研究報告』106集、2001年3月、参照。

21 中谷宇吉郎については以下の文献を参照。杉山滋郎『中谷宇吉郎』ミネルヴァ書房、20015年。神田健三編『中谷宇吉郎年譜』大森一彦編『中谷宇吉郎著書目録』中谷宇吉郎『中谷宇吉郎集』8巻、岩波書店、20001年。上記の文献で甲鳥書林との具体的なやりとりをしめず記述はないが、甲鳥書林から『続冬の華』（1940年）、『第三冬の華』（1941年）、『樹水の世界』（1943年）、2刷は養徳社から刊行、養徳社から共著で『科学随筆選』（1945年）、甲文社から『寺田寅彦の追想』（1947年）、『楡の花』（1948年）、書林新甲鳥から『立春の卵』（1950年）を刊行している。

22 「四季消息」『四季』15号、1936年2月10日。

23 伊東は6号（1935年3月）から、保田は7号（1935年4月）から、大山は18号（1936年5月）から寄稿。3人が同人となったのは53号（1940年12月）より。なお、55号（1941年2月）には釈迺空と前川佐美雄が一度のみ寄稿。

24 堀辰雄『堀辰雄全集』8巻、筑摩書房、1978年、28、9頁。

25 小田富英編『柳田国男全集』別巻1、筑摩書房、2019年、272頁。

26 新村については新村恭『広辞苑はなぜ生まれたか 新村出の生きた軌跡』（世界思想社、2017年）参照。

27 「古井勇氏を悼む」新村出著、新村猛・新村徹編『新村出全集』14巻、筑摩書房、1972年。

28 新村出著、土岐善麿・新村猛編『新村出全集』15巻、筑摩書房、1973年、486頁。

29 林哲夫「甲鳥書林周辺」『SUNUS』4号、2000年9月。また、前掲『伊賀の郷土史あれこれ』は1942年4月に「東京に営業所を設け」（33頁）と記す。中谷宇吉郎『続冬の華』（甲鳥書林、1942年3月、7版）にある甲鳥書林の住所には「東京市神田区鎌倉町七」とある。

30 増田周子「宇野浩」『未発表書簡』二十八通。竹村坦・加藤朝鳥・加藤寿々子・福永渙・石村一郎・大江勤・小川正夫・宮西豊逸・矢倉年宛。『関西大学文学論集』56巻2号（2006年10月）には矢倉宛宇野浩二書簡（1940年2月8日）が翻刻・収録されており、矢倉の住所は「世田ヶ谷区森町一ノ八三」となっている。いつまで東京にいたかだが、柳田国男『炭焼日記』（同『柳田国男全集』20巻、筑摩書房、1999年）には訪ねてきた矢倉から「京都の話をきく」とあるうえ、前掲『柳田国男全集』別巻1には1945年2月5日に

「京都の養徳社に移った矢倉年宛てに」とあるので、1945年1、2月頃には空襲の影響もあって支社を引きあげたものと思われる。

31 「書林放話」『甲鳥』15号、1943年7月。

32 同右。

33 「創刊早々に続々廃刊 1年間で既に4000種を淘汰 愈々嚴重な出版統制」『朝日新聞』1940年6月30日付。

34 新村と天理教との関わりは図書館を介したもので、新村出「天理図書館の思出」天理図書館『天理図書館三十周年 寄稿文集』天理大学出版部、1975年、参照。1930年の本館落成式の記念講演会、1937年の開館7周年記念式、1942年の開館12周年記念式で講演をし、開館10周年記念式には姉崎正治とともに来賓として招かれた（年表「天理図書館『天理図書館四十年史』天理大学出版部、1975年、「図書館記念講演会」『天理時報』638号、1942年10月25日）。また1942年設置の天理教亜細亞文化研究所の顧問にも就任していた（開所披露に研究発表会 期待をあつむ亜細亞文化研究所『天理時報』689号、1943年10月24日）。

35 養徳社『昭和十九年度（自昭和十九年十月十四日 至昭和二十年三月卅一日） 第壹回営業報告書』

36 柳田国男の前掲『炭焼日記』には、1944年5月31日に『雪国の民俗』の出版で訪ねてきた村治夫と矢倉年から「養徳社新計画のことなど」を耳にしている。また社設立の翌月15日には土橋利彦から「創立祝の会の記念品」をもらい、出版届2通に調印している。

37 新村出の「天理の出典」（新村出著、泉井久之助編『新村出全集』4巻、筑摩書房、1971年）の冒頭には「このたび甲鳥書林が天理時報社と統合、新組織の下に協力することとなったので、天理といふ名について新村先生に伺ひに参つたところ、一応その席で出典を挙示くだされた上、翌日さらに半紙に示して与へられた」という甲鳥書林の解説と「甲鳥書林土橋利彦君の需によりて筆を走らす者也」という新村の解説が付されている。また、新村は『童心録』（1946年刊、新村出著、松村博司編『新村出全集』12巻、筑摩書房、1973年）で、「新興の出版業者の養徳社の方の社名は天理の名と共に古き由緒があつたが、『養徳』とは諸葛孔明が其子を戒めた言葉の中にある。」と記されている。古き由緒だが、奈良県立大学ユーラシア研究センター「近世・近代の思想研究会」で、中島敬介氏より、『続日本紀』の天平9年12月27日にも「大倭国を改めて大養徳国と書くことにした」という記述がある（ことを）教示いただいた。

- 38 『株式会社 養徳社定款』。
- 39 前掲『天理図書館四十年史』38頁。富永は1940年10月時点で館長就任(83頁)。高橋も図書館主任を務めたが、1937年に天理教教庁東京出張所詰に転任したとある(81頁)。
- 40 養徳社『昭和十九年度(自昭和十九年十月十四日 至昭和二十年三月卅一日)第壹回営業報告書』には「資産上の重要な変動は、予ての計画に依り、昭和十九年五月三十日京都市中京区蛸薬師通室町西入姥柳町二〇番地株式会社成宮商店(宅地百四十七坪二合八勺建坪百四十八坪)の土地家屋買収契約成立し、手付金を交付、近く移転登記を完了の予定なり、右は南蛮寺跡にして歴史的に由緒深き所なり。」とあり、ここが京都支店となる可能性があったのかも知れない。戦後はここに京都支店が置かれた。
- 41 「養徳社の誕生」『天理時報』77号、1944年5月14日付。
- 42 それ以外には中河与一の『新科学的』同人で、幾度かの寄稿も確認できる。また新村出記念財団には庄野誠一から新村出に宛てた書簡が2通残されている。1939年8月18日付と同年11月18日付。前者は未開封、後者は寄稿願いである。1939年時点で新村と庄野の交流があったことが確認できる。
- 43 前掲『堀辰雄全集』8巻、24、5頁。なお、後年矢倉は『晩夏』など堀の本作りのこだわりについて「堀さんの本づくり」(堀辰雄『堀辰雄全集』別巻2、筑摩書房、1980年)に書いている。
- 44 木村徳三『文芸編集者の戦中戦後』大空社、1995年、223頁。
- 45 同右、224頁。
- 46 前掲『堀辰雄全集』8巻、322、3頁。
- 47 前掲『炭焼日記』1944年9月25日。矢倉と「養徳文庫に何か出す約束」をしているが、これは実現していない。
- 48 ただし、雁魚來往研究会、會津八一記念館編『養徳社・四季書房・中央公論社と會津八一の往来書簡』(新潟市會津八一記念館、2017年)に収録された會津八一と養徳社のやりとりを見ると、生駒が窓口になって中市や矢倉だけが担当していたわけではない。
- 49 「養徳叢書」小堀杏奴『母への手紙』養徳社、1947年。
- 50 田坂憲一『乗合船』について、『藝文研究』102号、2017年6月。
- 51 「編集後記」『乗合船』1号、1945年5月。湯川秀樹と『乗合船』同人との交流は湯川秀樹『乗合船』『自己発見』(毎日新聞社、1972年)参照。この時期の湯川と吉井勇の交流は細川光洋『湯川秀樹未発表書簡吉井勇宛六通(翻刻)附吉井勇宛未発表短歌を含む九首』(国際関係・比較文化研究)14巻1号、2015年9月の書簡や吉井勇「湯川さんの歌」桑原武夫・井上健・小沼通二編『湯川秀樹』(日本放送出版協会、1984年)にも記載。
- 52 伊豆流翁「小引」『乗合船』1号、1945年5月。
- 53 前掲『編集清記』。
- 54 前掲『文芸編集者の戦中戦後』224頁。
- 55 前掲『伊賀の郷土史あれこれ』373頁。
- 56 前掲『堀辰雄全集』8巻、343頁。
- 57 同右、345頁。
- 58 同右、350頁。
- 59 田坂憲一『乗合船』について、『藝文研究』102号、2017年6月。ただし、近藤健史「野村胡堂と矢倉年 胡堂の書簡が語るもの」(『研究紀要』22号、2009年3月)収録の1947年9月8日付の矢倉宛野村の住所も同じである。野村と矢倉との書簡は近藤健史「野村胡堂の終戦のあと 矢倉年への書簡より」『研究紀要』26号、2013年3月)にも掲載。
- 60 大山定一の軌跡は「大山定一年譜(吉川幸次郎・富士正晴編『大山定一』創樹社、1977年)参照。大山は1934年から『コギト』に、1936年から堀辰雄が編集する『四季』に投稿している。また同書によれば伊東静雄とも交友があった。
- 61 大東亜学術協会については、久保田裕次「大東亜学術協会の設立と活動」『京都大学文学部研究紀要』17号、2019年3月、参照。
- 62 「編輯後記」『学芸』1巻2号、1943年7月。
- 63 田坂憲一「書物を紡ぐ人々 吉井勇『流離抄』を中心に」『文学・語学』27号、2016年12月。
- 64 この頃の吉井と川田の交流は田坂憲一「吉井勇と川田順 昭和二十年前後の書簡を中心に」『社会科学』46巻4号、2017年2月、を参照。本論で指摘される「落味」も甲文社の関係者が多く寄稿する。

- 65 「あとがき」『手帖』1冊、1947年8月。
- 66 同右。
- 67 同右。
- 68 1949年6月頃には甲文社出版部の住所は中京区河原町通六角下ルになっているが(泉井久之助『古典と現代』甲文社出版部、1949年)、1950年6月頃には元の下鴨の住所になっている(武者小路実篤『湖畔の画商 世界の旅』甲文社、1950年)。
- 69 前掲『伊賀の郷土史あれこれ』375頁。
- 70 書林新甲鳥時代の矢倉年から新村出に宛てられた葉書・手紙が新村出記念財団に残っており、1955年11月時点で中京区麩屋町通二条上ル、翌年10月時点で大阪市北区衣笠町堂ビルに事務所が置かれていることが確認できる同財団及び所蔵資料の利用に際しては菊地暁氏、新村恭氏の御教示を得た。ここに記して感謝申し上げます。
- 71 『人間』の位置づけについては高橋英夫「人間」解説(小田切進監修・高橋英夫他著『鎌倉文庫と芸芸雑誌「人間」』(大空社、1993年)参照。
- 72 「編輯後記」『人間』1巻1号、1946年1月。
- 73 大山が『人間』に投稿した「作家の歩みについて」とほぼ同題の著書『作家の歩みについて トオマス・マン覚書』が甲文社から刊行されている。